

国立音楽大学附属図書館主催
《朗読の楽しみ》 第1回

2010年11月25日(木) 17:15~19:15
図書館2階 自由閲覧室

プログラム

1. プロローグ
2. 朗唱「よだかの星」(宮沢賢治)
3. お話 ~たやさんを囲んで~
4. 読んでみよう!
5. 朗唱「雪渡り」(宮沢賢治)

たや^{よしこ}仁子(言語造型家) プロフィール

日本語・外国語、標準語・方言を問わず、「ことば」に関するあらゆる活動に興味を持っている。言語造型を鈴木一博氏に師事。現在は、小学校の教諭として勤務しながら、言語造型家として活躍中。

今までの公演より：

- 2007年9~3月 オイリュトミー公演 メルヘン「ヒマラヤのふえ」朗唱(ラマチャンドラン作、福音館書店)
- 2008年12月23日 クリスマス公演 「ともしび」(語り公演)、「キリスト伝説集」(セルマ・ラーゲルレーヴ作)より
- 2009年5月 語り芝居「藪の中」(芥川龍之介作)
- 2009年9月 オイリュトミーザール・アウラ2周年記念公演にて 片山敏彦「心の中心から」ほか朗唱
- 2010年3月 公演「こころのうた」(叙情詩公演) 枕草子、からたちの花、待ちぼうけ(北原白秋)、方言詩、奥の細道、ほか
- 2010年4月 語り「おきな草」(宮沢賢治)
- 2010年8月 オイリュトミー公演「ぐりとぐら」(中川李枝子作)、「きつねの窓」(安房直子)

朗読・音読・音について書かれた図書：

- 1) 鴨下信一『日本語の呼吸』(筑摩書房)、2004年。 請求番号：J115-987
- 2) 川島隆太、安達忠夫『脳と音読』(講談社現代新書)、2004年。
- 3) 『NHKアナウンサーとともにことばカアアップ』NHK ラジオテキスト、2010年。
- 4) 田守育啓『賢治オノマトペの謎を解く』(大修館書店)、2010年。

(末松淑美)

宮沢賢治(みやざわ けんじ) 1896 1933 (明治 29 昭和 8)

詩人, 童話作家, 農芸科学者, 宗教思想家。岩手県剩貫(ひえぬき)郡花巻町(現, 花巻市)の質古着商の長男として生まれ, 浄土真宗の濃密な信仰の中で育つ。幼少年時から鉱物採集などに熱中した。盛岡中学2年のころから短歌を制作。1914年中学卒業, この年島地大等編《漢和对照妙法蓮華經》を読んで感動, 終生熱烈な法華信者となる。15年盛岡高等農林学校農学科に入学。片山正夫《化学本論》を読み, 物質観の基礎を与えられ, 座右の書となる。20年ころから特に田中智学に傾倒, 田中の主宰する国柱会に入会, 父親にも日蓮宗への改宗を迫るが容れられず, 21年1月無断出京, 自活しつつ童話制作や布教活動に従事するが, 8月に帰郷, この年の12月から26年3月まで花巻農学校教諭。この間, 1922年1月から口語詩制作がはじまり, 詩集《春と修羅》(1924), 童話集《注文の多い料理店》(1924)を自費刊行。前者は嶋潤, 佐藤惣之助らに激賞された。26年3月で農学校退職後, 別宅に自炊独居して羅須地人協会を設立, 若い農民たちに農学や芸術論を講義, また無料で肥料設計を行うなど献身的活動に入るが, 治安当局の疑惑を招き, また賢治自身の健康状態の悪化により挫折する。31年に奇跡的に一時回復して東北碎石工場技師として活動した以外, 晩年のほとんどを病床で送り, 自作の改稿改作, 文語詩制作などに没頭した。33年9月21日死去。その膨大な詩と童話は, みずみずしい言語感覚, 奔放な想像力, 自然との交感に裏打ちされた豊かな表現と構成, 普遍的な幻想性とリアルな地方性の並存する多彩さ, 文明への深い洞察等により, 次第に多くの読者を獲得し, またその生前の質実で献身的な人柄と活動ぶりは死後も多くの讃仰の対象となり聖人化の傾向さえ生んだ。童話の代表作に《銀河鉄道の夜》《風の又三郎》《セロ弾きのゴーシュ》などがあり, 1931年11月3日に手帳に記した独白《雨ニモマケズ》は有名。

天沢 退二郎

(出典:『世界大百科事典』平凡社, 2005)

「よだかの星」



1921年ごろに書かれた童話。賢治の死の翌年1934年に発表された。

あらすじ

「よだかは実に醜い鳥です。顔はところどころ味噌をつけたようにまだらで、くちばしは、ひらたくて、耳までさけています。」

よだかは、はちすずめやかかせみの兄ですが、その醜さのため鳥の仲間のつらよごしだと他の鳥たちから馬鹿にされます。鷹からは「よだか」と鷹の名前がまぎらわしいと、名前をかえるよう因縁をつけられます。

仲間からさげすまれ、鷹からも脅かされてあまりにつらくなった「よだか」は遠くの空の向こうに行ってしまうと太陽に頼みますが、夜の鳥だから星にたのむよう言われます。星にたのむと星からはその願いを思い上がりだと馬鹿にされます。それでも空をのぼっていき、とうとう息絶えます。しばらくすると「よだか」は自分の体が燐のように青い光をはなっているのに気がつきます。そして「よだかの星」は燃え続け、今でも燃え続けていると語られています。

「雪渡り」

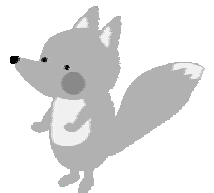
1921・1922年（大正10.11）に雑誌「愛国婦人」に掲載された創作童話で、デビュー作である。

あらすじ

雪がすっかり凍って、いつもは歩けない畑や野原の上をどこまでも歩いていける冬のある日、四郎とかん子の兄妹は雪渡りの歌をうたいながら森の近くまで来ると、子狐紺三郎と出会います。2人は「狐は人をだますから」と警戒しますが、遊んでいるうちに仲良くなります。

次の雪の凍った月夜の晩に、兄妹は狐小学校の幻燈会（映写会）に招待されます。幻燈会ではお酒を飲んで酔った人間のおじいさんや若い男の人が、野原でおかしなものを食べている写真を見せられます。その後で、狐小学校の生徒が作った団子を2人は勇気を出して食べます。狐たちは2人が狐を信じてくれたと大喜びして「狐は決して嘘は言わない」と躍り上がって歌いだします。

兄妹は狐小学校の狐達と心を通い合わせて森から家に帰りました。



ゆきわた
雪渡り

その一

雪がすっかり凍こって大理石よりも堅かたくなり、空も冷つめたい滑なめらかな青あおい石の板いたで出来ているらしいのです。

「堅雪かたゆきかんこ、しみ雪しんこ。」

お日様ひさまがまっ白しろに燃もえて百合ゆりの匂においを撒まきちらしました雪をゆきぎらぎら照てらしました。

木なんかみんなザラメを掛かけたように霜しもでぴかぴかしています。

「堅雪かたゆきかんこ、凍しみ雪しんこ。」四郎しろうとかん子とは小さな雪沓ゆきぐつをはいてキックキックキック、野原に出ました。